

城下町  
ふらり  
歴史探訪

第23回

わらしなしょうはく  
藁科松伯の墓  
(相生町)



▲藁科家の墓。松伯の墓石は左側一番手前です。

◀善立寺に安置されている松伯の坐像

今回は善立寺にある藁科松伯貞祐の墓を紹介いたします。松伯は米沢藩医で上杉鷹山を補佐した家臣を育て、細井平洲を鷹山の師範に推薦した人物です。

「善哉館」に学んだ人々

松伯は元文2年(1737)に米沢藩医藁科周伯の嫡子に生まれました。周伯は若くして亡くなり、松伯は12歳で藁科家を継ぎます。宝暦7年(1757)から江戸勤めとなり、3年間勉学に励みました。同9年に8代藩主重定の近習、翌年には重定の養子となった鷹山の学問師範に命じられ、同12年に重定の御側医に就きました。

松伯は学問に優れ、博学強記米沢第一と称されたと言います。松伯の書斎「善哉館」には、竹俣立綱、莅戸善政、木村丈八など俊才が集まり、指導を受けました。後に鷹山の改革を補佐した家臣の面々です。

平洲を鷹山の師範に推薦

師範選定の経緯は、松伯の遺稿集「善哉館遺稿」の平洲が寄せた序文に記されています。江戸遊学中の松伯が偶然、平洲の講釈を聞き感心し、その後奉行

となった竹俣の師に推薦、平洲に入門した竹俣は藩主重定に平洲を推挙し、師範に決まりました。平洲は序文で、鷹山の師範となったのは「皆松伯の言を以てなり」と感謝しています。

平洲の初講義は明和元年(1764)、平洲37歳、鷹山14歳、松伯28歳の初冬でした。この頃既に松伯は病気におかされ、春先には御側医を辞任しています。

治療で帰国し33歳で死去

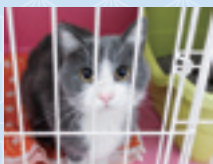
明和4年(1767)、鷹山が17歳で9代藩主となると、松伯は病気をおして鷹山の御側医となりますが、同5年の秋頃に治療のため米沢に戻りました。鷹山と平洲は帰国する松伯に、送別の漢詩を贈っています。

帰国した松伯は鷹山の将来を案じながら療養しますが、その甲斐なく同6年8月24日に33年の短い生涯を閉じました。辞世の句は「今朝の露とわれも消えり草の蔭」です。

同8年、平洲は初めて米沢に来て鷹山や藩士を指導しますが、松伯の命日に善立寺を訪れ、哀悼の和歌三首を手向け、墓前に涙しました。

紙説  
表解

飼えなくなった犬猫の引取りを行う置賜保健所。取材に訪れたこの日は、小部屋に数頭の猫が収容されていました。ある檻の中にいたのは、生後1か月ほどの子猫の兄弟。この季節は、繁殖による子猫の引取りが多くなると言います。じゃれ合いながら、時折外を見つめる瞳は、いつまでも輝いていました。



編集後記

4月から広報よねざわの編集担当になりました。初取材は花回廊キャンペーン、米沢駅からのスタートです。自分の足でその地を巡り、素敵な広報を作りたいと思います。(高橋)

特集の記事を書き終え、飼い犬と久しぶりに散歩へ。あぜ道にはつくしの群生が広がり、辺りを心地よい風が吹き抜けました。広報4年目の春です。どうぞ、よろしくお願ひします。(米野)